



文部科学省「ユネスコ未来共創プラットフォーム」事業
 ー第1回リレートーク:WITH/AFTERコロナ時代の
 国際平和・持続可能な開発への貢献



ユネスコ精神の内部化と マルチステークホルダー・ パートナーシップの構築へ ー開発アプローチの歴史的俯瞰と 今日的な課題認識を通してー

@ZOOM
 主催:一般社団法人SDGsプラットフォーム
 2021年1月27日
 佐藤真久
 ユネスコ未来共創プラットフォーム事業 座長
 東京都市大学大学院 環境情報学研究所 教授
 m-sato@tcu.ac.jp/
 masahisasato@hotmail.com



ユネスコの特徴

- ①ユネスコの設立(1946)
- ②ユネスコの領域(教育、科学、文化)
- ③ユネスコの組織形態(本部、地域事務所、ユネスコ加盟国)
- ④民間NGOとの協力関係(例:日本ユネスコ協会連盟)
- ⑤ユネスコ憲章
 - ・戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりで (defenses of peace) を築かなければならない...
 - ・政治及び経済的取り決めにもとづく平和は永続する平和ではなく、平和は人類の知約および精神的遺産の上に築かなければならない
 - 国際連盟が第二次世界大戦を阻止できなかった経験を踏まえ、精神的遺産を考慮
 - 国家や民族間の相互理解の機能を担う組織
 - "人類の良心"(conscience of mankind) by P.J.Nehru
- ⑥ユネスコ起源である3組織から受け継いだ精神的遺産
 - ・知的協力国際委員会(ICIC, 1922-1941)、国際教育局(IBE, 1925-1969)、新教育連盟(NEF, 1921-1966)



ユネスコと日本のかかわり

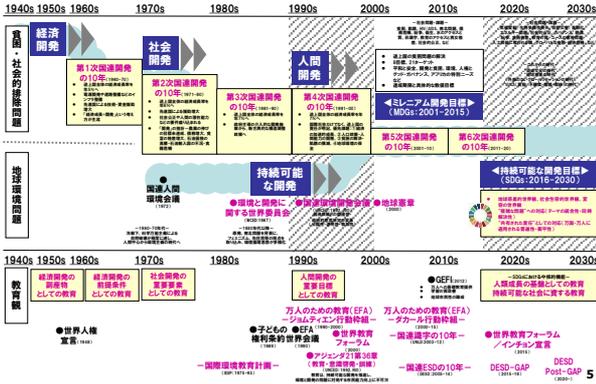
- ①日本のユネスコへの参加(1951)、日本の国連加盟(1956)
- ②ユネスコ精神を軸にした民間NGOの取組・展開(仙台ユネスコ協会、1947年設立、世界初)
- ③様々な活動(例)
 - ー日本ユネスコ協会連盟(例:世界寺子屋運動)、ユネスコ・アジア文化センター(例:教材開発、文化協力、教育協力、国際交流)
 - ーエコパーク/ジオパーク/世界遺産(自然・文化・複合)/無形文化遺産(ICH)/創造都市ネットワーク/ユネスコスクール/等



開発アプローチ、 開発における教育観の 歴史的俯瞰



持続可能な社会を担う人づくり 開発アプローチ、教育観の変遷(佐藤真久、2020)



ミレニアム開発目標(MDGs) 2001-2015

ミレニアム開発目標

- 1 極度の貧困と飢餓の撲滅
- 2 普遍的な初等教育の達成
- 3 ジェンダー平等の推進と女性の地位向上
- 4 乳幼児死亡率の削減
- 5 妊産婦の健康の改善
- 6 HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病のまん延防止
- 7 環境の持続可能性を確保
- 8 開発のためのグローバルなパートナーシップの推進



**問題間の相互作用、
構造の共通化が
進む世界**



**グローバルで複雑な問題
(Global Problematique)**

気候変動
ユースの雇用問題
教育の質
自然災害
高齢化
エネルギー問題
生物多様性喪失
水問題(質、量、アクセス)

グローバルな金融・経済危機
ガバナンス
肥満
貧困格差
社会的公正
紛争
人工智能に奪われる職
COVID-19パンデミック



**これからの時代
～世界的な動向を踏まえて**

人新世の時代
—人間由来の自然の変化—
—大加速化(great acceleration)

Steffen, W., et al. (2011). "The Anthropocene: conceptual and historical perspectives." Philosophical Transactions of the Royal Society A: Mathematical, Physical and Engineering Sciences 369(1938): 842-867.



**これからの時代
～世界的な動向を踏まえて**

- “大加速化の時代”
 - 戦後の社会経済の大変化による“地球への相乗的影響”
- “外部のないグローバル化の時代”
 - 1980年代中葉以降の“経済のグローバル化”
- “地球惑星の時代”
 - 貧困・社会的排除問題だけではなく、地球資源制約・環境問題への配慮、人権のみではなく自然生存権への配慮
- “混成文化の時代”
 - グローバルな移動と交流がもたらす文化の混成性(社会基盤や文化の大きな変化)
- “VUCA(変動・不確実・複雑・曖昧)の時代”
 - 既存の枠組に基づく対応の限界(リスク社会、レジリエンス社会、危険社会化、格差社会化)、状況的対応力の重要性



**2030年の“ありうる日本社会”
4つの大変化と国際秩序の変動**

- ①人口の変化**
 - 少子化/長寿化/東京一極集中/世界の人口爆発
- ②技術の変化**
 - 革新技術(生命工学・人工知能・ロボット・自動運転・IoT)/情報通信/エネルギー
- ③環境の変化**
 - 異常気象/災害/食糧
- ④時空の変化**
 - サイバー/グローバル化/宇宙/海洋/時間

国際秩序の変動

- 多極化/中国の台頭/シーレーン安全保障

国家戦略本部(2014)「2030年の日本」検討・対策プロジェクト



持続可能な社会の実現
—地球環境問題と貧困・社会的排除問題の同時的解決—

“グローバル化”
人間生活のあらゆる領域の
市場化(商品・貨幣世界化)

開発による自然破壊
(経済の大型化・高度化
近視眼的開発・人口増加・貧困)

人権×貧困
(被害と便益の不平等な分配)

**貧困・社会的排除問題
(人間—人間)**

**地球環境問題
(人間—自然)**

一世代内・世代間公正(将来世代)

一人間の公正(生態系)・世代内・世代間公正(将来世代)



持続可能な社会の実現



北村(2019)



学習の4つの柱:
「学習:秘められた宝」

学習の4つの柱
「学習:秘められた宝」

(UNESCO 21世紀教育国際委員会、
15か国の政府関係者・教育専門家から成る、ドローール報告書 1996)

- “access to learning”
→学習へのアクセス:アクセスの平等
- Learning to Know
→知ることを学ぶ:知識
- Learning to Do
→為すことを学ぶ:技能
- Learning to Be
→人間として生きることを学ぶ:価値
- Learning to live together
→共に生きることを学ぶ:相互理解・共生

+

ESD: Learning to Transform Oneself and Society

個人変容と社会変容の学びの連関:個人と社会の変容 (UNESCO, 2009)



21世紀の生涯学習社会において克服すべき
8つの文化的対立・緊張

学習の4つの柱
「学習:秘められた宝」

(UNESCO 21世紀教育国際委員会、
15か国の政府関係者・教育専門家から成る、ドローール報告書 1996)

- ①世界的なものと地域的なものとの緊張 →[①世界と地域]
- ②普遍的なものと個人的なものとの緊張 →[②普遍と個別]
- ③伝統と現代性との緊張 →[③伝統と現代]
- ④長期的なものと短期的なものとの緊張 →[④短期と長期]
- ⑤競争原理と機会均等の配慮との緊張 →[⑤競争と公正]
- ⑥知識の無限の発展と人間の同化能力との緊張→[⑥知識と同化能力]
- ⑦精神的なものと物質的なものとの緊張 →[⑦精神と物質]

+

- ⑧人工知能と人間知性との緊張 →[⑧AIと人間知性]

International Commission on Education for the Twenty-first Century(1996)
Learning: the treasure within. UNESCO Publishing, p.249.(1-7)に、筆者(8)加筆・修正



日本に求められる
ユネスコ精神の内部化と
マルチステークホルダー・
パートナーシップ



MDGsとSDGs
～異なる社会背景と問題認識

貧困・社会的排除問題の解決



MDGs(2001-2015)
開発アジェンダ
人権・社会的公正・開発(経済・社会・人間)

2000年代

貧困、飢餓、HIV/AIDS、南北問題、債務危機、紛争、衛生、水のアクセスと質、非識字、教育のアクセスと男女格差、社会的公正、など

貧困・社会的排除問題
/地球環境問題の同時的解決



SDGs(2016-2030)
開発・環境アジェンダ
地球資源制約・環境保全・自然生存権・
人権・社会的公正・開発(経済・社会・人間)

今日

気候変動、生物多様性喪失、自然災害、高齢化、エネルギー問題、社会的公正、ガバナンス、肥満、紛争、貧困格差、教育の質、ユースの雇用問題、人工知能に奪われる職、グローバルな金融・経済危機

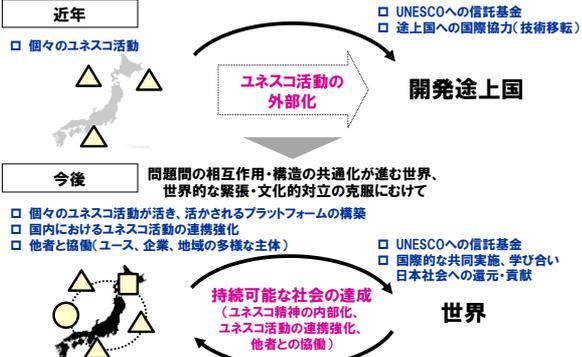


教育の質の向上に資するESD/
SDGs達成に資するESD

“..ESDIは、SDGs達成を実現するもの(enabler)である..”(UNESCO)



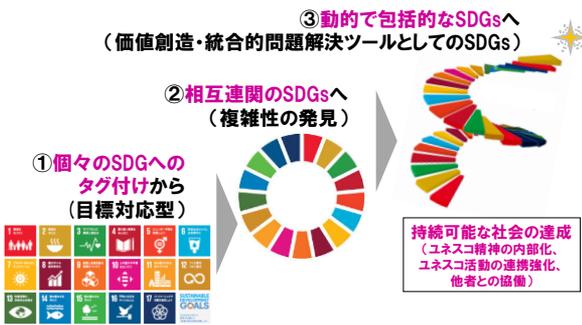
ユネスコ精神の内部化と
マルチステークホルダー・パートナーシップ



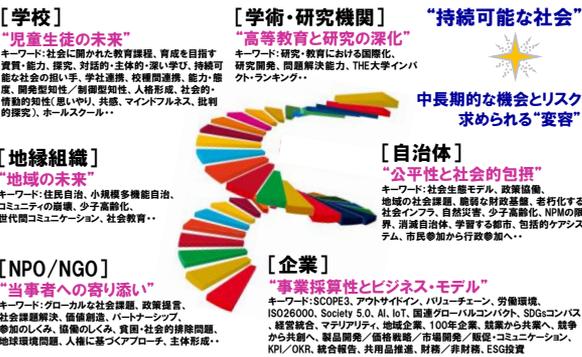
ユネスコ精神の内部化と
マルチステークホルダー・パートナーシップ



ユネスコ精神の内部化と
マルチステークホルダー・パートナーシップ



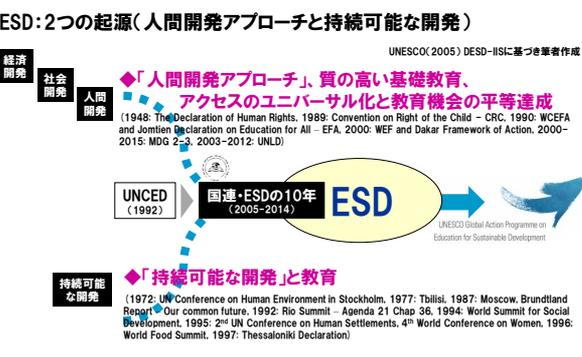
SDGsの取り組む
様々な主体と異なる動機



ユネスコ精神の内部化と
マルチステークホルダー・パートナーシップ



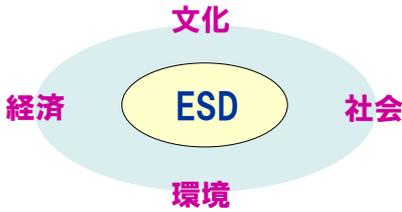
「国連・ESDの10年」(2005-2014)
の振り返り





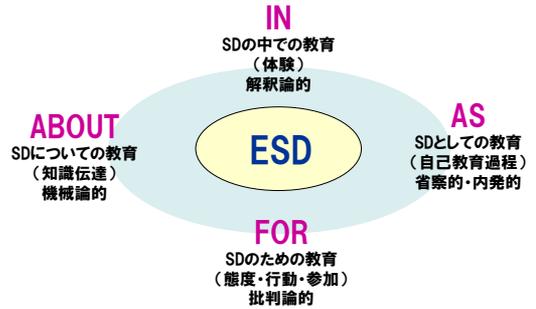
ESDの意味するところ

ESD: 持続可能性に関する諸課題とESD



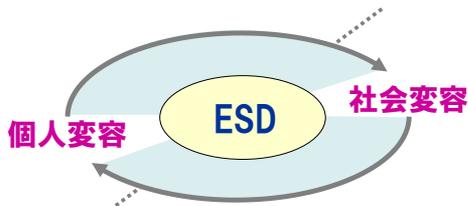
ESDの意味するところ

ESD: 異なる位置づけ (About, In, For and As)



ESDの意味するところ

ESD: 個人変容と社会変容の学びの連関

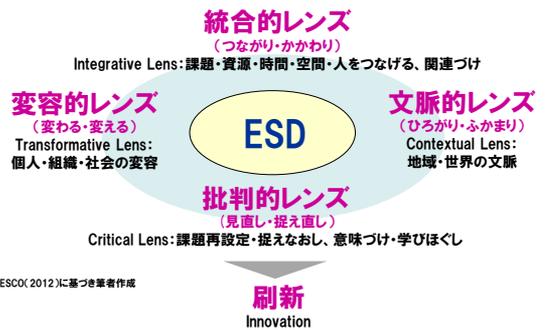


新しい学習の柱 (UNESCO 2009)
 "Learning to Transform Oneself and Society"
 佐藤 (2016) 訳: 個人変容と社会変容の学びの連関



ESDの意味するところ

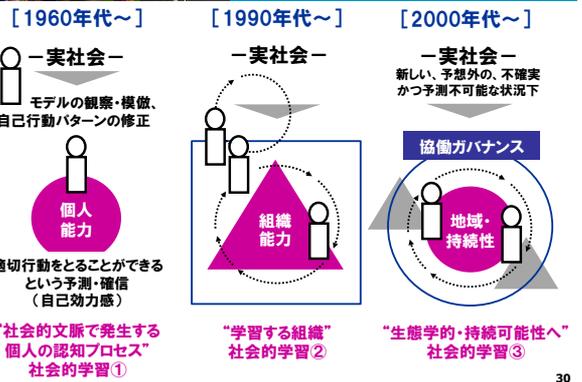
ESD: 4つのレンズ (統合、文脈、批判、変容)

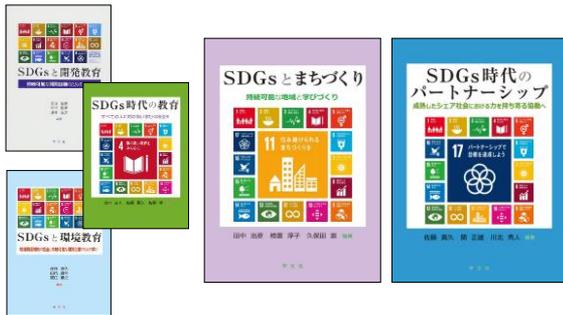


UNESCO (2012) に基づき筆者作成



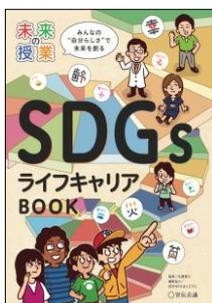
SDGsのための教育 (UNESCO, 2017)
 ~"持続可能性キー・コンピテンシー"





- ◆教材の位置づけ
 - ・SDGsと、日本の227のソーシャル・プロジェクトから抽出された日本の課題群「課題解決中マップ」(<https://2020.etic.or.jp/>)を関連づけた、世界と日本をつなぐ「グローバル教材」
 - ・SDGsの理解をさらに深める「探究型教材」
 - ・「わたしの行動」、「わたしたちの協働」へとつなげる「実践型教材」

- ◆ストーリー、キャラクター設定、問い設定
 - ・経験学習理論で指摘されている学習スタイルを活かしたキャラクター(ゆみ、アレックス、のぞみ、けんた)設定
 - ・バックキャスト思考
 - ・混成文化
 - ・UNESCO(2012)のESDレンズやUNESCO(2017)の持続可能性キー・コンピテンシーに基づく問いの設定



- ◆教材の位置づけ
 - ・SDGsと、日本の227のソーシャル・プロジェクトから抽出された日本の課題群「課題解決中マップ」(<https://2020.etic.or.jp/>)を関連づけた、世界と日本をつなぐ「グローバル教材」
 - ・SDGsの理解をさらに深める「探究型教材」
 - ・「自身のあり方」、「わたしの行動」、「わたしたちの協働」へとつなげる「実践型教材」
- ◆ストーリー、キャラクター設定、問い設定
 - ・経験学習理論で指摘されている学習スタイルを活かしたキャラクター(ゆみ、アレックス、みのり、けんた)設定
 - ・バックキャスト思考
 - ・混成文化
 - ・UNESCO(2012)のESDレンズやUNESCO(2017)の持続可能性キー・コンピテンシーに基づく問いの設定

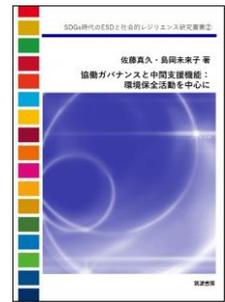
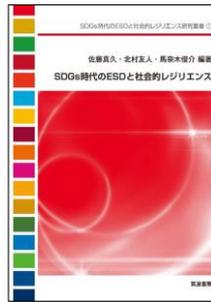


- ◆発行：朝日新聞社／制作：株式会社 トモノカイ
- ◆監修：田村学(國學院大学教授)／佐藤真久(東京都大学教授)
- ◆価格：生徒用 1,500円(税別)／教師用解説書 3,000円(税別)
- ◆販売対象：全国の高等学校(中高一貫校を含む)



講座の内容を踏まえた本書は、単にSDGsを「知る」ための本ではありません。SDGsを自分ごととして「行動する」「議論する」という、アクティブに取り組める内容も含まれます。

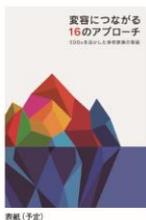
- 知る
第1章は、地球の未来に置喙を贈らしています。第2章では、「持続可能」について、3分読める分量で解説しています。第3章は、17のゴールの解説です。スニキリとした文章で、「自分ごと」に思えるよう工夫しています。
- 行動する
第4章では、100個の身近なアクションを挙げています。今日からSDGsのために行動できます。
- 議論する
第5章では、現代の日本が抱える5つのテーマを挙げています。答えのない問題を考える教材として最適です。



書籍『変容につながる16のアプローチ～SDGsを活かした学校教員の取組』
大切なのは「持続可能性とは何か」
を問い続けること

2019年4月から教員とともに削り上げてきた書籍『変容につながる16のアプローチ～SDGsを活かした学校教員の取組』が完成します。原稿を書き進める中で、2つの発見がありました。1つは書籍など教えるためのツールとして整理されたものだけでなく、地域の自然環境やその土地に暮らす人々、生物、すべてが「教材」になり得るということです。SDGsのレンズを通してこれらの「教材」を、授業に活用させていくのだ、とある教員は語ってくれました。2つ目の発見は、この

SDGsのレンズを手に入れるためには「持続可能性とは何か」を問い続けること、そしてそこへ向かうための道を、時流を捉える感性を研ぎ澄ませながら、一步一步歩みながら進んでいく必要があるということです。SDGsレンズとは、単にSDGsを知っているから手に入れるわけではありません。この書籍の中で、各教員がどのように教材を活かした授業を削り上げたのか、その背景や経緯について言語化してもらいました。原稿を読んでいたことは、どんな良質な書籍や教材も、それを



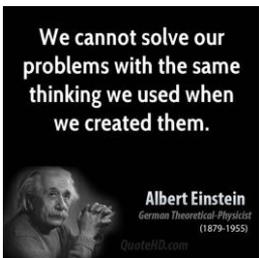
どう活かすかは扱う人の問題意識と感性にかかっているということです。制作に携わった18名の教員は、なぜ学習発表を廃止し続けることができるのでしょうか。この書籍がそのことを考える1つのきっかけになれば嬉しいと思います。

朝日新聞コラム
SDGsの実践に向けて①～SDGsの本質を捉える

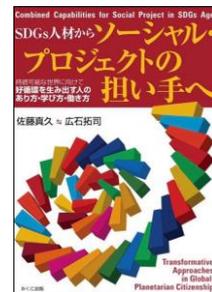
2030
SDGsで変える



<https://miraimedia.asahi.com/satomasahisa01/>



「問題を創出したときと同じような考え方で、どんな問題も解決できない。(アルベルト・アインシュタイン)」



【本書のキーワード】

環境・開発観の歴史的変遷、社会的学習の歴史的変遷、サステナビリティに関する概念の変遷、「国連-ESDの10年」の経緯、個人変容と社会変容の学びの連関、持続可能性キー・コンピテンシー、VUCA(変動・不確実・複雑・曖昧)社会、貧困・社会的排除問題、地球環境問題、人間開発アプローチ、ミレニウム開発目標(MDGs)、持続可能な開発目標(SDGs)、地球憲章、強い持続可能性、コミュニケーション合理性、協働力バランス、求められる求援力・受援力、社会・情動的知性(SEI)、認知バイアス、学びと協働の相乗効果、経験と論理と相乗効果、探究の学び(探究の高度化・自律化)、全体最適性、資本の好循環、複雑な問題、地球惑星の地球市民性